

小 学 校

平成 2 7 年度

教育研究員研究報告書

外国語活動

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	
1	必然性のある活動について	2
2	外国語活動における学びの段階について	3
3	コミュニケーションの手だて	4
III	研究の構想	
1	目指す児童像	6
2	研究の仮説	6
3	研究構想図	7
IV	研究の方法	8
V	研究の内容	
1	実態調査	9
2	検証授業	
(1)	検証授業 1	13
(2)	検証授業 2	15
(3)	検証授業 3	17
3	検証授業の結果と考察	19
VI	研究の成果と課題	
1	成果	23
2	課題	24

研究主題

児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする授業づくり

I 研究主題設定の理由

平成 28 年度中に学習指導要領が改訂され、小学校英語が教科化されることが現実的な見通しとなった。近年の急速なグローバル化の進展の中で、英語教育の一層の充実が極めて重要な課題である。今後、様々な場面において外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが想定される。

現在、東京都における外国語活動の実態については、自治体間で ALT の配置に差があり、児童が外国語活動の時間に外国語を使って外国人と触れる機会に格差が生じている。また、小学校の教員の多くは英語の教科指導法、英語教授法を大学の教員養成課程で習得していないため、英語を使ったコミュニケーション活動を行わせるための指導力に不安を抱えている教員は多い。このことは「平成 26 年度小学校外国語活動実施状況調査」（文部科学省）結果において、小学校の学級担任（外国語活動担当教員）が最も課題であると感じていることが「教員の指導力(51.7%)」であったという結果からも明らかである。そのため、『Hi, friends!』などの指導書に沿った展開に頼ることが多くなり、児童の実態や高学年の発達段階に即した授業改善が進みにくい現状がある。

平成 20 年 3 月に小学校学習指導要領が改訂され、外国語活動が 5、6 年に位置付けられてから 7 年がたつが、この間、児童が求める外国語活動の楽しさや授業に対する思いにも変容が見られ始めている。平成 25 年度教育研究員が行った調査結果によると、外国語活動が楽しい理由として最も多かったのが「ゲームが楽しい」であった。しかし、外国語活動で大切だと思うことの中では、「自分の良さや友達の良さも見付ける」「先生や友達と英語で伝え合うこと」が合わせて 4 割近くを占め、「ゲーム、歌、チャンツ」は最も少なかった。このことから、児童にとって楽しい活動が必ずしも大切な活動と捉えられていないということが分かる。

昨年度の教育研究員は、「コミュニケーションにチャレンジする活動」を意図的に取り入れることで、児童がコミュニケーションの達成感・満足感を味わうことができるだろうという仮説を立て、妥当性を認める成果を得ている。しかし、①児童が使える語彙や表現が少ないために、充実したやり取りを英語だけで行うことが難しかった。②全ての児童にコミュニケーションの達成感・満足感を味わわせるには継続して「コミュニケーションにチャレンジする活動」に取り組む必要があることを課題として指摘している。

そこで今年度は、昨年度の研究に新たな視点を加え、「コミュニケーションにチャレンジする活動」を「必然性のある活動」として位置付けた。さらに、児童に自信をもって英語の表現を使わせるための工夫を行うことによって英語でのコミュニケーションの楽しさを味わわせることを目指し、「児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする授業づくり」を研究主題に設定することにより、共通テーマ「思考力・判断力・表現力等を高めるための授業改善」を図ることとした。

本研究の研究主題にある「積極的なコミュニケーション」とは、発話回数を増やすことをねらったものではなく、「児童が自分の思いや考えを伝えたい、また、相手の思いや考えを聞

きたいという動機付けがあり、自ら主体的に行っているコミュニケーション」を意味する。単に自分の思いとは関係なくパターン化された英語の表現を使わせるのではなく、自分の思いを伝え、理解してもらう喜びを味わわせることを目指すコミュニケーションのツールとしての表現を学び、自分の思いを伝えるために学んだことを活用させることで、外国語活動における思考力・判断力・表現力等を高めることができると考えた。

II 研究の視点

1 必然性のある活動について

小学校学習指導要領解説外国語活動編では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するためには、児童が使える外国語を駆使し、様々な相手と互いの思いを伝え合い、コミュニケーションを図ることの楽しさを実際に体験することが大切であると記されている。コミュニケーションの楽しさを味わわせることが、コミュニケーションへの積極的な態度を育成することにつながる。そこで、外国語活動において、外国語を使ってコミュニケーションを図ることの楽しさを体験させるためには、必然的に外国語を使う場面の設定と、他者とコミュニケーションを図る必然性のある活動の二つが必要であると考えた。

実生活において、児童が外国人の観光客に道案内をしたり、外国からの来客をもてなしたりするなど、外国語を使わなければコミュニケーションを図ることが難しい場面に出くわす機会は少ない。そこで、本研究では、活動を通じて外国語を使ってコミュニケーションを図る必然性のある場面を設定することとした。

コミュニケーションを図る必然性のある活動とは、コミュニケーションの楽しさを味わうことのできる活動である。ただ単に歌、チャンツ、ゲームといった活動が楽しいということだけでなく、自分の思いが相手に通じた、あるいは相手の思いが分かったという、外国語で伝え合う楽しさを味わわせることが重要である。JACET（一般社団法人大学英語教育学会）によると、「学習者間で自然な情報を交換させるには、話し手と聞き手の間に互いにもっている情報の違いがなければならない。この情報の差（インフォメーション・ギャップ）を埋める形で対話を行わせる練習を導入することにより、教室内で行う活動が機械的・不自然になることが避けられる。」¹とされている。コミュニケーションを図る上では、情報を交換し合う話し手と聞き手との間にインフォメーション・ギャップがあることが大事な要素となってくる。インフォメーション・ギャップをうまく利用することで新たな気づきが生まれ、コミュニケーションの楽しさにつながる。機械的に語句や文を暗記させたり、パターン練習のような活動をさせたりするだけでは積極的なコミュニケーション活動にはつながらない。児童が本気で伝えたくったり聞きたくったりする情報をやり取りできるような活動を設定することが大切である。

また、小学校高学年になると、知的発達が進み、好奇心はより強くなるため、発達段階に合った活動を設定することが重要である。小学校学習指導要領解説外国語活動編にも記されているように、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で得た知識や経験などを生かしながら、外国語を使って考えたり、発表したりする活動を展開することは、児童の知的好奇

¹ JACET(2001)「教育問題研究会」

心を刺激することにつながる。児童自身が作成した作品や資料には、児童の思いが反映されている。図画工作科で作った作品を活動の中で利用したり、社会科で学習した歴史上の人物を取り上げてクイズにしたりすることで、児童が他者に自分の思いを伝えたいという動機を高めることができる。

以上のことから、児童の興味・関心や知的発達に合わせた題材を活動に取り入れ、コミュニケーションを図る必然性のある活動を工夫することで、児童はコミュニケーションの楽しさを味わうことができ、更に積極的にコミュニケーションを図りたいという意欲が高まると考えた。

2 外国語活動における学びの段階について

文部科学省の『小学校外国語活動研修ガイドブック』では、「言語習得理論の基礎として、外国語学習の過程において、①音声から言葉を学び始める、②スパイラルな学習、③動機付けのある学習を有することが望ましい」²としている。

①の「音声から言葉を学び始める」とは、聞く活動（インプット型の活動）を十分に取り入れ、それに基づいて話す活動（アウトプット型の活動）へ授業を構成していくということである。単元構成においても、1時間の授業構成においても、児童が負担なく、コミュニケーションへの意欲を高めるには、インプットからアウトプットへという流れを基本とすることには必然性があると考えられる。

②の「スパイラルな学習」とは、同じ学習項目を指導計画全体を通して繰り返し取り上げる学習方法のことである。児童の生活に近い表現等、必然性のある表現をコミュニケーション活動の中で使う場を、年間計画あるいは、学校全体の指導計画の中で繰り返し設定していくことは効果的であると言える。

③の「動機付けのある学習」とは、コミュニケーションを図りたいという意欲を高めるためには、動機付けが必要であることを示している。パターン練習のような機械的な繰り返しではなく、できることの楽しさ、難しいことに挑戦することの楽しさ等、児童の実態に即した動機付けの要因を見付け、関心・意欲が高まる活動を設定することや、学習の到達目標が明確である単元・評価計画を立てることが有効である。

以上のような言語習得における理論は、英語の教科指導法、英語教授法を習得していない小学校の教員にはなじみがなく、理解は十分ではない。前述のとおり、「平成26年度小学校外国語活動実施状況調査」(文部科学省)において、小学校の学級担任(外国語活動担当教員)が最も課題であると感じていることが「教員の指導力(51.7%)」であったという結果からも明らかである。

そこで、本研究において、児童の「積極的にコミュニケーションを図ろうという思い」を高めるために、これらの内容を踏まえた単元構成を『学びの段階』とし、一つのモデルケースとして示すことができるよう、次のように整理した。

² 旺文社,文部科学省監修(2009)「小学校外国語活動研修ガイドブック」

「児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする」学びの段階

	活動	活動例	児童の姿	振り返りカードを活用し、見通しをもたせる
①	*基礎的活動（触れる） インプット型の活動（単語～簡単なセンテンスを聞く活動）中心	絵本の読み聞かせ・歌 パターンプラクティス キーワードゲーム ビンゴゲーム ミッシングゲーム 等	聞く 口まねする 分かるように する 知る	
②	*疑似的コミュニケーション活動（知る） インプット型の活動～簡単なセンテンスのやり取りへ	パターンプラクティス カルタゲーム ペア・グループトーク インタビューゲーム等	聞く 口まねする 記憶しようとする 聞き取る 言おうとする	
③	*コミュニケーション活動（使う） 対話型コミュニケーション活動 自分の意思で発話する活動	ペア・グループトーク インタビューゲーム プレゼンテーション 他教科と関連した活動 等	自分の意志 で対話する 相手のことを理解しようとする	

3 コミュニケーションの手だて

研究主題である「児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする授業づくり」のために、以下のような工夫を行った。

(1) コミュニケーションのポイントの提示

本研究では、表現を工夫して、自分の思いや考えを相手に伝えようとしたり、相手の思いや考えを注意深く聞いて、理解しようとしたりするための手だてとして、コミュニケーションのポイントを提示し、児童に意識させた。これらのポイントは、国語の「話すこと・聞くこと」における既習事項を基に作成したものであり、コミュニケーション能力の素地として身に付けさせたい力である。これらのポイントを活動の前に繰り返し提示し、児童に意識させることで気持ちのよいコミュニケーションを図ろうとする態度が育つことが期待できる。特に以下の三つのポイントを提示していく。

- ・目を見て話すこと・聞くこと (Eye Contact)
- ・注意深く聞くこと (Listen carefully)
- ・聞き取りやすい声の大きさと話すこと (Clear Voice)

(2) コミュニケーションの可視化

児童が英語でのコミュニケーション活動を行う際にまず必要となるのは、双方の英語の表

現を理解することである。どのようにコミュニケーション活動を行うのか、発話すべき文や順番などを提示し、その流れを具体的にイメージさせるために可視化することが有効であると考えた。

担任一人では双方向のやり取りを音声だけで児童にイメージさせることは十分ではない。そこで、一方の発話すべき言葉を色紙に、もう一方の言葉を前者とは異なる色紙に書き、吹き出しのようにして示す(写真1)。それにより、発話の順番や発話すべき言葉を視覚的にも確認させ、定着を図ることができる。また、児童が活動中に戸惑ったときの支援にもなる。

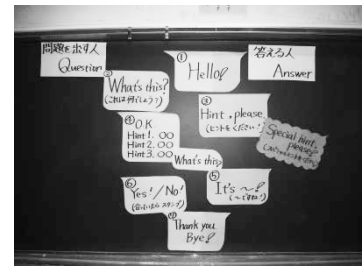


写真1

さらに、実際のコミュニケーション場面を映像化し、活動の前に視聴させるという方法もある。映像を見せることによって、児童にコミュニケーション場面をより具体的にイメージさせることができる。

可視化することによって、少しでもコミュニケーション活動における児童の不安を軽減し、明確にどのようなコミュニケーションを図るべきか理解させ、児童に自信をもって発話させたい。

(3) コミュニケーションの補助資料

コミュニケーション活動を行う際に、「伝えたい」「聞きたい」という児童自身の思いがなければ積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿を望むことは難しい。そこで本研究では、その思いをもたせるためにはコミュニケーション活動の中で必要となるツールが児童自身の作成したものであることが重要であると考えた。例えば、国について紹介するためのお

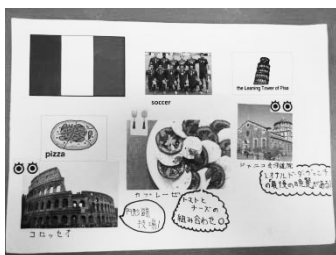


写真2

すすめカード(写真2)を作成したり、クイズのヒントとなる絵や写真を用意したり、相手に説明する内容をより分かりやすくするために児童が用意した写真をタブレットで見せたりすることである。教師側で用意したものでなく、自分で集めた児童自作の補助資料をコミュニケーション活動の中で使うことで、伝えたい内容に自分の思いが入ったものとなり、積極的なコミュニケーションが期待できる。

(4) コミュニケーションにおける良さの共有

コミュニケーションを図る際、どのような態度が相手に対して良い印象を与えるのか、児童に具体的な良さをイメージさせることは大切である。児童が良い関わりをしている場面を見逃さず、教師がその場で褒めたり、振り返りの時間に良さを価値付けたりすることで、児童に身に付けさせたいコミュニケーションの態度を共有させることができる。それを「友達のココイネ」(写真3)などの掲示物にし、児童が常に具体的な良さのイメージをもってコミュニケーション活動に参加できるように工夫した。

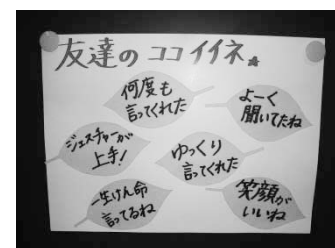


写真3

Ⅲ 研究の構想

1 目指す児童像

本研究では、研究主題にある「児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする授業づくり」という点から具体的な児童像を考え、以下のように定めた。

・外国語を使って、生き生きと相手と関わろうとする子供

外国語活動に夢中になって取り組んでいる子供。

・すすんで伝えたい、聞きたいと思える子供

自分の伝えたい内容があり、それに対して自分なりの思いをもって伝えようとしている子供。

相手のことに興味をもち、それを知りたいという思いをもって聞こうとしている子供。

・学んだことを使って、相手のことを理解しようとする子供

既習事項を活用し、自分の思考だけでは得られない気づきを得て、更に相手への理解を深めていく子供。

2 研究の仮説

「平成 26 年度小学校外国語活動実施状況調査」（文部科学省）によると、小学生の 7 割が「英語が好き」「英語の授業が好き」と回答している。しかし、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」（文部科学省 英語教育の在り方に関する有識者会議 平成 26 年 9 月）でも指摘されているように、小学校の高学年では抽象的な思考が高まる段階であるにもかかわらず、外国語活動の性質上、体系的な指導は行わないため、児童が学習内容に物足りなさを感じている。また、平成 25 年度教育研究員が行った「小学校外国語活動調査」においても、児童は互いの思いを伝え合うコミュニケーション活動は大切な活動だと感じながらも、楽しさを見いだせていないという児童の実態を明らかにしている。

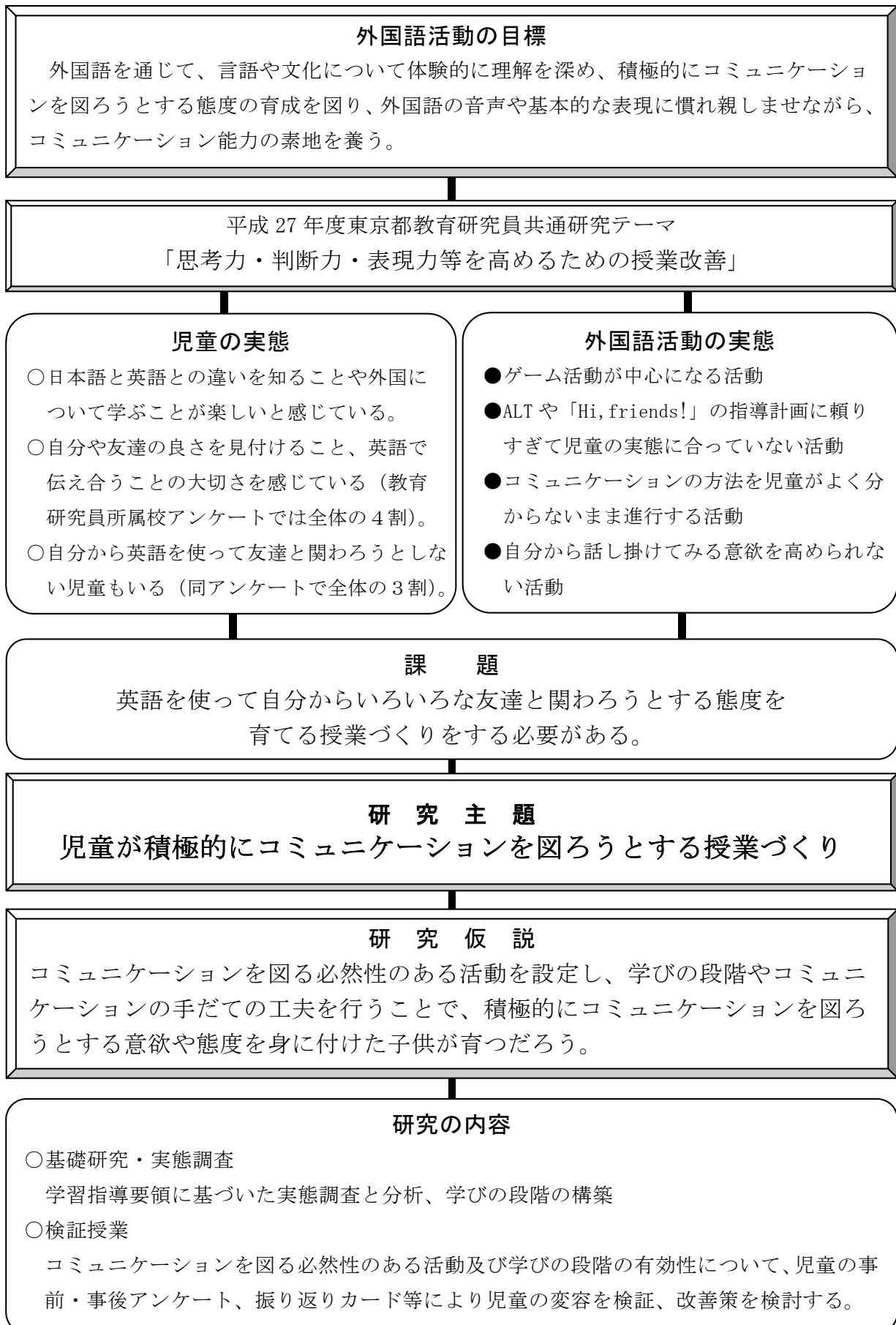
そこで、児童が「自分のことを伝えたい」、また「相手のことを知りたい」という思いをもったコミュニケーション活動を授業の中に盛り込んでいくことが必要となると考えた。そのような活動にするためには児童にとって必然性のある活動が不可欠であり、必然性があれば単なるフレーズのやり取りでなく思いを伴った意味のあるコミュニケーション活動になることが予想される。積極的にコミュニケーション活動ができ、「うまく通じて楽しかった」という成功体験を積むことによって、更にその思いは強化されると考える。

また、学びの段階を踏まえて必要な活動を選定し指導することや、コミュニケーションの手だてを工夫することは、児童がコミュニケーションを図ろうとするときの難しさを軽減し、「伝わった」という思いをよりもたせやすくする。

以上のことから、次の仮説を設定した。

コミュニケーションを図る必然性のある活動を設定し、学びの段階やコミュニケーションの手だての工夫を行うことで、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を身に付けた子供が育つだろう。
--

3 研究構想図



IV 研究の方法

1 基礎研究

次の方法により、外国語活動及び英語教育の現状・方向性の把握、児童の実態把握を行った。

- ・文部科学省「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告」（平成26年9月26日英語教育の在り方に関する有識者会議）及び「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（平成25年12月）等の内容把握と学習指導要領解説外国語活動編の内容・分析
- ・過去の教育研究員が実施したアンケートの分析
- ・教育研究員の所属校5、6年生児童を対象としたアンケート調査による実態把握及び課題分析

2 実践研究

基礎研究を踏まえ、研究の視点を絞り、それぞれについて具体的な手だてを構想した。また、その効果を検証するための授業を実施した。

3 研究のまとめ

検証授業の実施後に、児童のアンケート結果や振り返りカード、見取った児童の活動等から授業の分析を行い、研究の仮説及び手だての有効性について考察した。また、三回の検証授業における成果と課題を踏まえ、「積極的にコミュニケーションを図りたいという思い」の高まる具体的な手だてをまとめた。

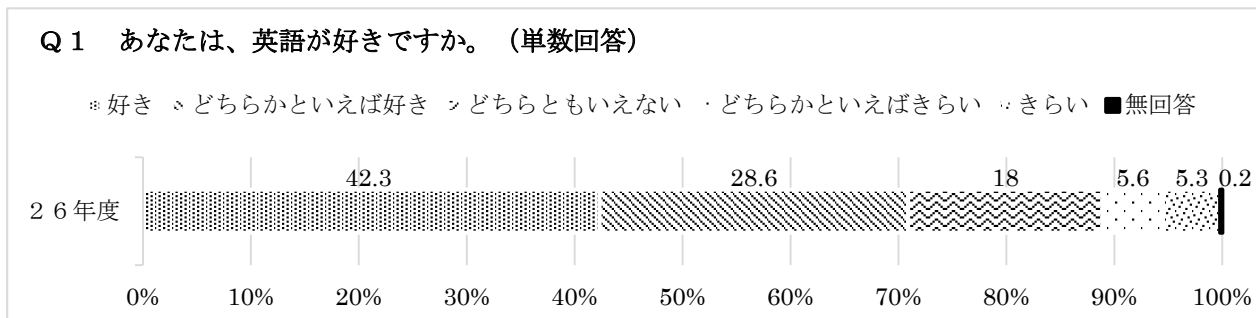
4 研究の計画

月 日	内 容	会 場・授 業 者
4月28日(火)	年間計画	東京都教職員研修センター
5月28日(木)	研究主題等について協議	墨田区立二葉小学校
6月26日(金)		練馬区立北原小学校
7月13日(月)		杉並区立桃井第三小学校
8月3日(月)		江東区立有明小学校
8月19日(水) ～8月21日(金)	御岳宿泊研修会	青梅市御岳山 宿坊
9月15日(火)	検証授業① “Where do you want to go?”	練馬区立北原小学校 第6学年 半田 友実
10月13日(火)	検証授業② “What’s this?”	東大和市立第八小学校 第5学年 永野 愛里子
11月17日(火)	検証授業③ “What do you want to be?”	墨田区立二葉小学校 第6学年 真田 洋子
11月30日(月)	研究報告書作成	三鷹市立第五小学校
12月7日(月)	研究発表会に向けての準備	立川市立第三小学校
1月26日(火)		羽村市立栄小学校
2月16日(火)	研究発表会 “What do you want to be?”	江戸川区立平井第二小学校 第6学年 小林 新歌

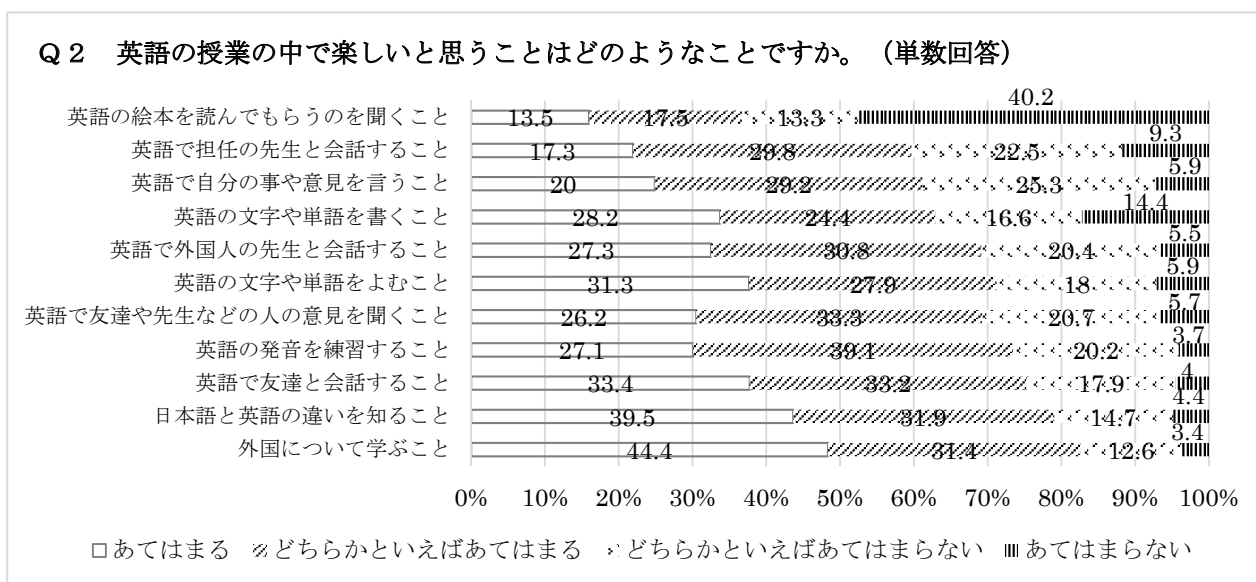
V 研究の内容

1 実態調査

先行研究として、文部科学省が実施した平成26年度小学校外国語活動実施状況調査を分析した。



児童の70.9%が「英語が好き、どちらかといえば好き」と回答していることから、外国語活動に肯定的な児童が多いことが分かる。

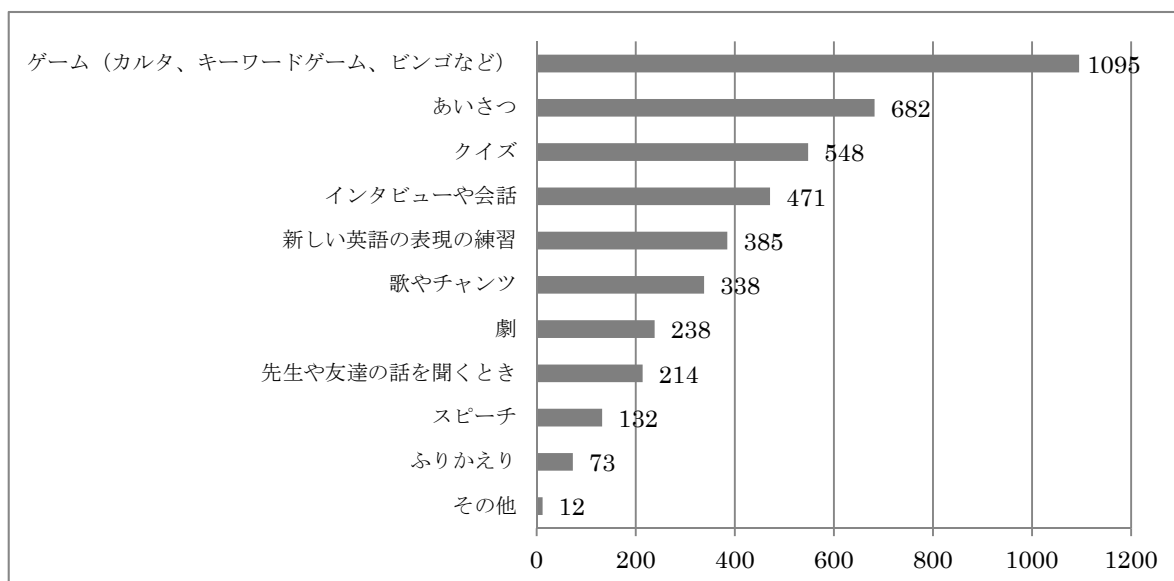


英語の授業の中で楽しいと思うことについて、児童の75.8%が「外国のことについて学ぶこと」、71.4%の児童が「日本語と英語の違いを知ること」、66.7%が「英語で友達と会話すること」と回答している。このことから、日本と比較しながら異文化に触れることや友達と英語を使った関わりの中で、英語の楽しさを感じていると考えられる。

現在の外国語活動の授業におけるコミュニケーションに関する現状を調べるために、外国語活動のコミュニケーション活動に対する意識調査アンケートを事前に1,494名の5、6年児童を対象に実施した。実施した学校は、以下の本部会教育研究員の所属校である。

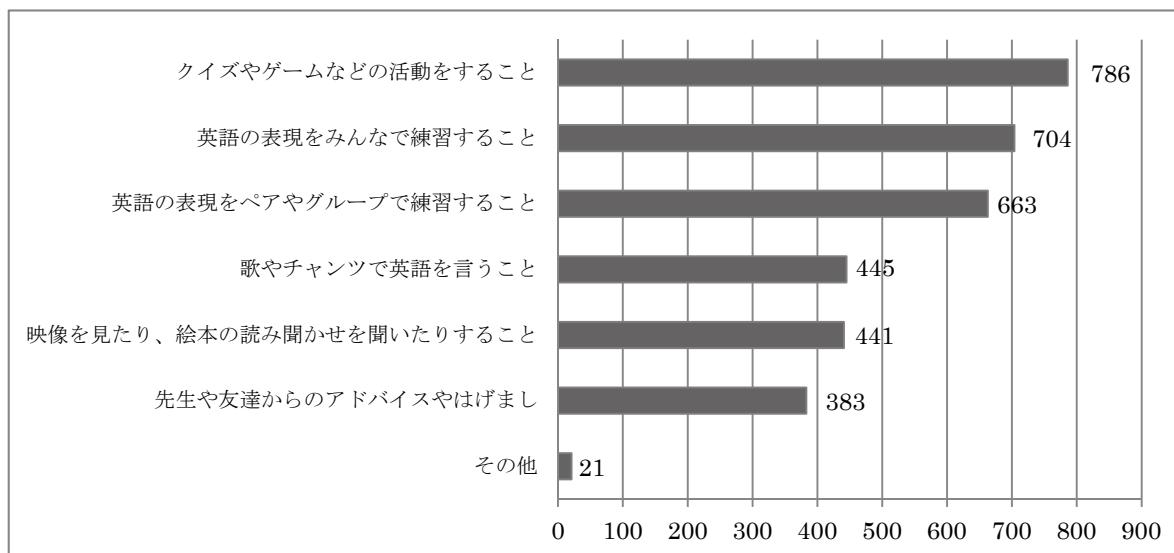
墨田区立二葉小学校 210名	江東区立有明小学校 174名
杉並区立桃井第三小学校 177名	練馬区立北原小学校 211名
江戸川区立平井第二小学校 32名	東大和市立第八小学校 248名
三鷹市立第五小学校 154名	立川市立第三小学校 156名
羽村市立栄小学校 132名	(平成27年9月に調査)

Q 1 友達と積極的に関わりたいと思う活動は何ですか。(複数回答)



児童が積極的に関わりたいと思う活動は、ゲーム、あいさつ、クイズの順で多かった。また、インタビューや会話で関わろうとする児童の数が1割程度であることから、自分の考えを伝える場面において友達と関わろうとする意欲がもてていないことが考えられる。児童が友達に聞いてみたい、話したいと思える題材を工夫する必要がある。

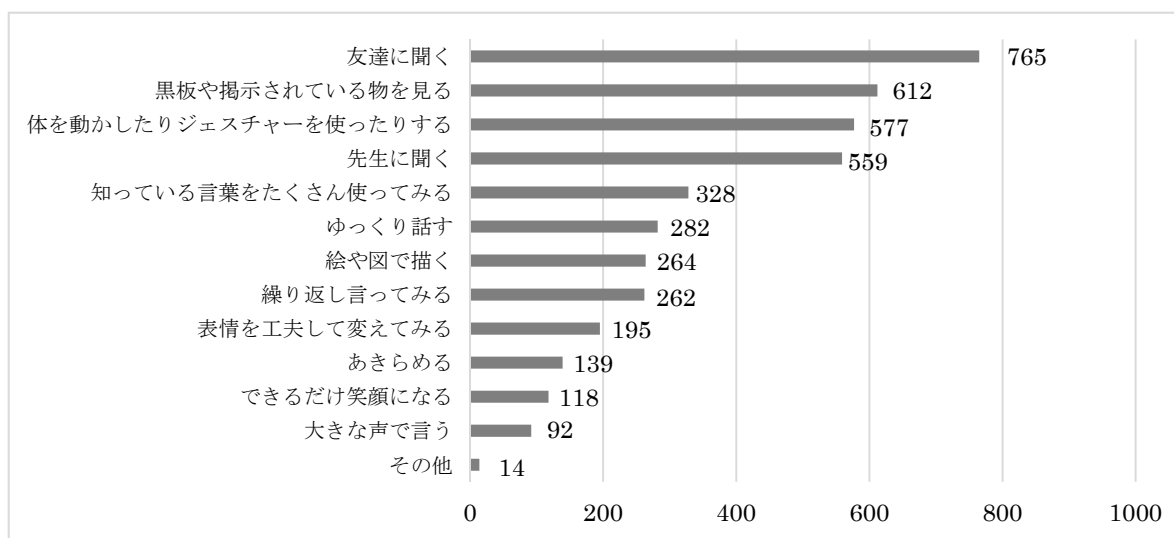
Q 2 一人でも自信をもって英語を使うことができるために有効だと思うものは何ですか。(複数回答)



英語を聞く活動よりも英語の表現を練習する活動の方が、英語のスピーキング力を高めるためには有効であると考えられる児童が多い。また、歌やチャンツの効果を実感できていない児童が多い。楽しさを求める一方、チャンツや歌に対しては、児童の発達段階にそぐわない内容があるかもしれないということが考えられる。

児童が自信をもって英語を使えるように、単語や表現を扱う際、単元の中での「学びの段階」をよく吟味し、インプット型の活動の工夫を図る必要がある。

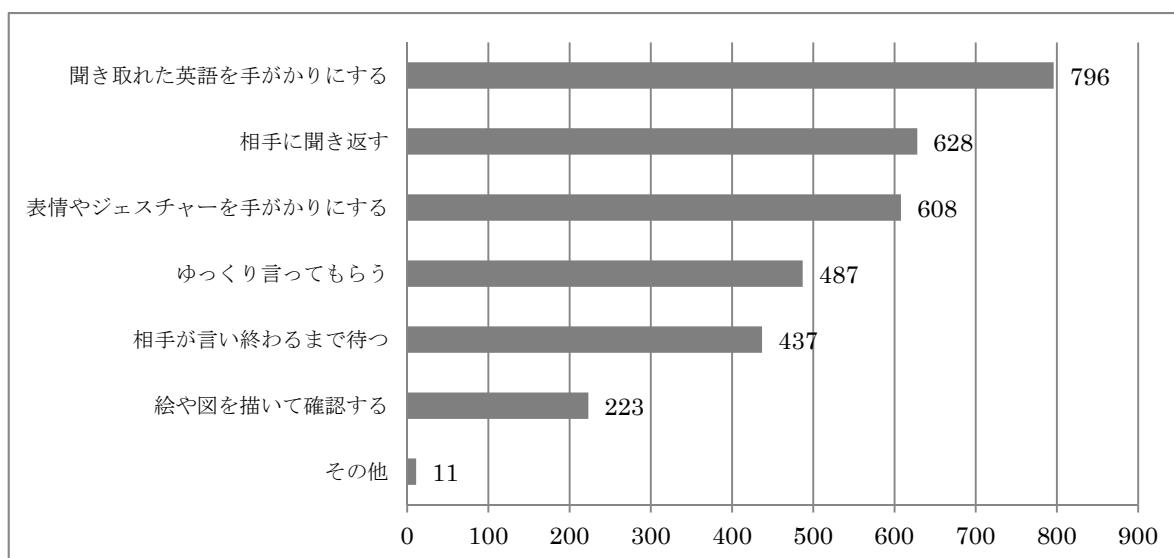
Q 3 相手にどう伝えたらよいか分からないとき、どのようなことをしていますか。(複数回答)



困ったとき、児童は教師に聞くより友達に聞いたり、掲示物を頼ったりして解決しようとしていることが分かる。自力解決の手段としては、黒板や掲示されている物を見る、ジェスチャーを使うという回答が多かった。また、知っている言葉を使ってみるのと同じくらい絵や図で描いて伝えることが有効であると感じている。

友達と関わり合いながら、英語の表現を身に付けたり、掲示物を手掛かりにして自力解決できる環境整備を行うようにしたい。また、インプットからアウトプットまでの「学びの段階」を工夫し、繰り返しの学習により成功体験をさせることで自信をもたせたい。

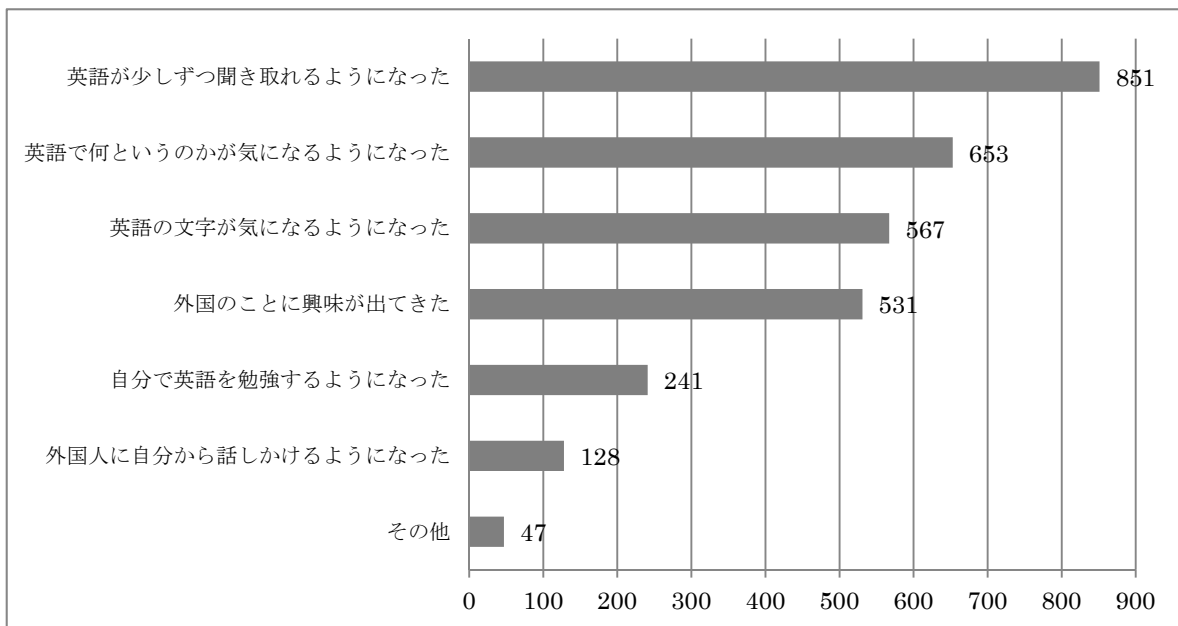
Q 4 相手が伝えたいことを理解するために、どのようなことをしていますか。(複数回答)



聞き取れた英語を手掛かりにしている、相手に聞き返す、表情やジェスチャーを手掛かりにするという回答が多かった。Q 3の結果では相手に伝える場面ではゆっくり話すことが有効であると考える児童 282 人(18.9%)に対し、Q 4の聞き取り・理解の場面では、ゆっくり言ってもらうことが相手の伝えたいことを理解するのに有効であると考えている児童が 487 人(32.6%)である。

以上のことから、「コミュニケーションのポイント」を提示することで、児童に相手の目を見て話すこと・聞くこと、注意深く聞くことなどを意識させていく。

Q 5 外国語活動の授業を受けて、生活で変わったことはありますか。(複数回答)



聞く力を身に付けた実感がある児童が多いことから、英語の音声に慣れ親しんできたことが分かる。また、外国のことや英語の音声・文字について知りたいという興味・関心が高まっている。しかし、実生活の中で英語を使う機会は少ない。そのため、児童の興味・関心に寄り添った活動を設定し、コミュニケーション場面を児童にとってより身近で実践的なものにしていく必要がある。

2 検証授業

検証授業では、児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする授業づくりの手だての検証と、改善策の検討を行った。

【検証授業1】(練馬区立北原小学校 第6学年の実践)

- (1) 単元名 “Let’s go to Italy.” 「自分が行きたいツアープランをつくって旅行しよう！」
“Hi, friends! 2 Lesson5”
- (2) 単元の目標 ア 自分の思いが伝わるように表現し、積極的に尋ねたり答えたりしようとする。
 イ 行きたい国やその理由について、尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。
 ウ 世界には様々な国があり、様々な人々が様々な生活をしていることに気付く。

(3) 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	イ 外国語への慣れ親しみ	ウ 言語や文化に対する気付き
①自分の思いが伝わるように、行きたい国やその理由を積極的に話したり、聞いたりしようとしている。 ②友達におすすめの国を紹介して、進んでコミュニケーションを図ろうとしている。	①行きたい国やその理由を尋ねたり答えたりしている。 ②国名や有名な食べ物、世界遺産などの表現を使おうとしている。	①世界には、様々な人たちが様々な生活をしていることに気付いている。

(4) 単元の内容

本単元では、旅行者が旅行代理店を訪れ、行きたい国とその理由を伝え、さらに、その国のおすすめを紹介してもらい、より中身の濃いツアープランを立てることを目的とした。旅行者は、自分が本当に行ってしてみたいという「思い」を込めたプランを伝え、旅行代理店は、グループで作った「おすすめカード」で、より詳しくその他の食べ物や観光地を伝える。話し手と聞き手の双方にインフォメーション・ギャップが存在するため、児童もよりコミュニケーションを図りたいと思って主体的に活動できると考えた。しかし、この活動では、行きたい理由やおすすめとして紹介する表現が多くなり、全てを英語で話すことは児童にとって負担になる。そのため、ジェスチャーで表現したり、絵を指して「this」と言ったりすることを認め、「何とかして伝えよう」とする気持ちを大切にすることにした。

(5) 単元の指導計画と評価計画

時	ねらい	学習活動	評価規準
1	・行きたい国の尋ね方や答え方、国名の言い方に慣れ親しむ。	・国名、観光地、食べ物の言い方を知る。	イ① ウ①
2	・行きたい国とその理由を答える表現、おすすめを紹介する表現に慣れ親しむ。 ・自分が行きたいツアープラン(仮)を作成する。	・児童作成のオリジナルチャンツ、スリリングカードゲーム、インタビューゲームをする。	ア① イ②
3 本 時	・自分が行きたいツアープランを作成する。 ・相手の行きたい国を聞き、おすすめの場所を紹介する。	・自分が行きたいツアープランを作成する。＜コミュニケーション活動＞	ア② イ①
4	・自分が作成したツアープランを積極的に伝えたり、答えたりする。	・「そうだ！世界旅行ツアーへ行こう！」をする。＜コミュニケーション活動＞	ア① イ①

(6) 本時（全4時間中の第3時間目）

ア 本時の目標

○自分の思いが伝わるように、行きたい国やその理由を積極的に尋ねたり答えたりする。

イ 本時の展開

	学習活動	○指導上の留意点 ・配慮事項 ●教材・教具	学習活動に即した 具体的な評価規準 (評価方法)
導 入	1 挨拶をする。 2 前時までの復習をする。 ・国の名前の確認をする。 ・チャンツを歌う。	○コミュニケーションのポイント を確認する。 ・児童が作ったチャンツを全員で一 緒に歌う。 ●CD、チャンツカード	
展 開	3 「自分の行きたいツアープランを作成しよ う」をする。 (1)ビデオを視聴して、活動の流れを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> A: 旅行者 B: 旅行代理店 A: Hello. B: Hi. Where do you want to go? A: I want to go to _____. B: Why? A: (Because) I want to ____ ____. B: Oh, Nice country. You can _____. A: I want to ____ (this) ____. B: OK. Nice country. Let's go. </div> (2)児童を半分に分け、やり取りの確認をする。 (3)前半、後半に分かれて活動する。	○コミュニケーションに関すること で気付いたことを発表させる。 ○国のチケットを発行してもら うことを確認する。 ○担任が作ったツアープランを見な がら、言い方の練習をする。 ・努力を要する児童は、状況に応じ て一緒に回って話したり聞いた りする。 ●旅行者：ワークシート ●旅行代理店：おすすめカード、 チケット	☆積極的に活動に取り 組んでいる。 【ア②(観察・チケ ット)】 ☆行きたい国や理由を 尋ねたり答えたりし ている。 【イ①(観察、振り返 りカード)】
ま と め	4 本時の学習を振り返る。 ・コミュニケーションについて気付いたことを 振り返りカードに記入する。 5 終わりの挨拶をする。	・めあての確認を再度行い、振り返 りのポイントをおさえる。	

【検証授業2】（東大和市立第八小学校 第5学年の実践）

(1) 単元名 “What’s this?” 「The プレゼンテーション of Japan!」

“Hi, friends! 1 Lesson7”

(2) 単元の目標 ア ある物について、積極的にそれが何かと尋ねたり、答えたりしようとする。

イ ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。

ウ 日本語と英語の共通点や相違点から、言葉の面白さに気付く。

(3) 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語への慣れ親しみ	ウ 言語や文化に対する気付き
① 英語の言い方が分からないものや日本の伝統的なものなどについて、積極的にそれが何か尋ねたり答えたりしようとしている。	①ある物が何かと尋ねたり、答えたりしている。 ②いろいろなものの英語での言い方や、日本独自の物の言い方を使おうとしている。	①和製英語や外来語と英語の違い、世界で通じる日本語を知り、言葉の面白さに気付いている。

(4) 単元の内容

本単元では、What’s this?やいくつかの英語の表現を使い、外国の人に日本独自の文化を知ってもらおう活動に取り組んだ。児童の主体的な活動を促すため“What’s this?”が自然に出てくるような活動「The プレゼンテーション of Japan」を設定した。外国の人にとって「これは何か。」と疑問に思う物を探し出し、実際に紹介することで児童が自分の意思を反映させることができ、コミュニケーションの意欲が高まると考えた。また、途中で友達同士での『Japan 検定』を行うことで、プレゼンテーションに必要な、紹介する物のジャンル、色、形などをヒントを何度も出し、その表現に慣れ親しませる機会とした。

(5) 単元の指導計画と評価計画

時	ねらい	主な学習活動	評価規準
1	・様々な物の言い方から、言葉の面白さに気付くとともに、身の回りの物を表す語に慣れ親しむ。	・身近な外来語や和製英語を見付け、英語での言い方を考える。	ウ①
2	・身の回りの物を表す語や、ある物が何かを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。	・ピクチャーゲームや背中絵は何？クイズ、チャンツで表現に慣れ親しむ。	ア① イ① ②
3	・日本独自の物の言い方や、言葉の面白さに気付く。 ・ある物が何かを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。	・「The プレゼンテーション of Japan」に向けて、日本独自のものについてのクイズ、プレゼンテーションの準備をする。	イ② ウ①
4 本 時	・自分が紹介する物が何かを積極的に尋ねてヒントを伝えたり、友達の紹介する物を当てたりする。	・『The Japan 検定!』で調べた物をクイズ形式で友達に紹介する。 <コミュニケーション活動>	ア① イ① ウ①
5	・What’s this?やこれまで習った表現などを使い、ALTに日本の物を紹介する。	・『The プレゼンテーション of Japan』で調べた物を、ALTに紹介する。 <コミュニケーション活動>	ア①

(6) 本時（全5時間中の第4時間目）

ア 本時の目標

- 日本の物をクイズにして、その使い方、背景などを相手に伝えたり、友達が紹介する物を予想して答えたりして、すすんでコミュニケーションを図ろうとする。

イ 本時の展開

	学習活動	○指導上の留意点 ・配慮事項 ●教材・教具	学習活動に即した 具体的な評価規準 (評価方法)
導 入	1 挨拶をする。 2 前時までの復習をする。 ・“What’s this?” チャンツ 3 本時のめあてを知る。	○コミュニケーションのポイントの確認をする。 ●CD、絵カード	
展 開	4 The Japan 検定をする。 (1)自分が選んだ日本の物が何か当ててもらおうクイズを出す。ヒントを出してから、What’s this?で尋ねたり、友達のを当てたりする。 (2)学級をA・Bの2グループに分け、前半はAグループが2～3人ごとの小グループになって出題ブースを作る。Bグループは個人でそのブースを回り、クリアするごとに検定合格スタンプをためていく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">(A: 出題者 B: 解答者) B: Hello. A: Hello. What’s this? B: Hint, please. A: OK . Hint 1 Food. Hint 2 Fresh fish. Hint 3 (絵やジェスチャー、実物など) What’s this ? B: It’s <i>Sashimi</i>! A: Yes. /No. (正解ならスタンプを押す。) B: Thank you. Bye. A: Bye.</div> (3)後半はAグループとBグループが交代して行う。	○ヒントの出し方など、やり取りの仕方を、板書を使って全体で確認する。 ・前時に準備をしたヒントを出す練習をする。 ・小グループ内では、同じ分野の言葉で一緒に問題を作成し、出題する時もお互いに助け合えるように助言する。 ・ヒントが難しい単語で聞き取れなかったり、言えなかったりする時は、出題者に、更にジェスチャーを使ったり、少し日本語を交えたりしてもよいことを伝える。 ・なかなか自分から回れない児童は、一緒に回って会話を促す。 ●スタンプカード、スタンプ、ヒントに使う実物や写真	☆積極的に活動に取り組んでいる。 【ア①(観察・スタンプカード)】 ☆日本の物についてのクイズを尋ねたり、答えたりしている。 【イ①(観察)】
ま と め	5 本時の学習を振り返る (1) 今日の学習を終えて、友達との関わりの中で気が付いたことなどを、振り返りカードに記入する。 (2) 数名の児童が発表する。 6 終わりの挨拶をする。	・本時の自己評価のポイントを押さえる。	☆今日の活動について気付きがある。 【ア①、ウ①(発表、振り返りカード)】

【検証授業3】（墨田区立二葉小学校 第6学年の実践）

(1) 単元名 “What do you want to be?” 「6-2 ノーベル賞を決めよう！」

～もし、1日だけ変身できる薬を発明したら…あなたは何になりたいですか～ “Hi, friends! 2 Lesson 8”

(2) 単元の目標 ア 積極的に自分の将来の夢について伝えたり聞いたりしようとする。

イ どのような職業に就きたいかを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。

ウ 世界には様々な夢をもつ同年代の子供がいることを知り、英語と日本語での職業を表す語の成り立ちを通して、言葉の面白さに気付く。

(3) 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語への慣れ親しみ	ウ 言語や文化に対する気付き
①積極的に自分の将来の夢やなりたいものについて伝えたり聞いたりしている。	①職業を表す語を聞いたり言ったりしている。	①世界には様々な夢をもつ同年代の子供がいることに気付いている。
②相手を意識して、薬を発明した理由や思いを尋ねたり、聞こうとしたりしている。	②就きたい職業について尋ねたり答えたりしている。	②職業を表す語について英語と日本語の共通点に気付いている。

(4) 単元の内容

本単元では、“What do you want to be?” “I want to be…” の表現に慣れ親しみ、ランキング形式にして互いの夢を言ったり聞いたりした。児童が自ら「コミュニケーションをとりたい」という思いをより強くもつために、単元の最後に、日本人のノーベル賞受賞の話題を切り口にし、「もしも1日だけ変身できる薬をあなたが開発したら」という架空の場を設け、なりたいものとその理由を尋ねるインタビュー活動を設定した。児童が「相手のことをより知りたい」「聞いてみたい」と思えるような場にするすることで、研究テーマにつながるのではないかと考えた。

(5) 単元の指導計画と評価計画

時	ねらい	学習活動	評価規準
1	<ul style="list-style-type: none"> 様々な職業の言い方を知り、慣れる。 世界には様々な夢をもつ同年代の子供がいることを知ったり気付いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ジェスチャークイズやキーワードゲーム、ビンゴゲーム、チャンツで職業の言い方を知る。 世界の子供のなりたい職業ランキングをする。 	イ① ウ①
2	<ul style="list-style-type: none"> 職業を表す語について英語と日本語の共通点に気付く。 就きたい職業について、尋ねたり答えたりする表現を知り、慣れ親しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> かるたゲームやミッシングゲーム、チャンツで職業の言い方に慣れ親しむ。 いろいろな職業の日本語と英語の言い方を比べる。 お仕事クイズをする。 	ウ②
3	<ul style="list-style-type: none"> 就きたい職業について、尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 「6年2組なりたい職業ランキング」を行う。 〈インタビュー活動〉 	ア① イ②
4 本 時	<ul style="list-style-type: none"> 慣れ親しんだ表現を使って、相手を意識して自分のなりたいものを言おうとしたり、聞こうとしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「6-2 ノーベル賞を決めよう！」を行う。 〈インタビュー活動〉 	ア① ア②

(6) 本 時 (全 4 時間中の 4 時間目)

ア 本時の目標

○慣れ親しんだ表現を使って、相手を意識して自分のなりたいものやその理由を尋ねたり、聞こうとしたりしている。

イ 本時の展開

	学習活動	○指導上の留意点 ・配慮事項 ●教材・教具	学習活動に即した 具体的な評価規準 (評価方法)
導 入	1 挨拶をする。 2 今日のめあてを確認する。 ①発明者になりきって「6-2ノーベル賞」に 選ばれるような説明を英語を使ってしよう。 ②選考委員になりきって、相手の説明や考えを 一生懸命聞こう。	○見通しがもてるように、前時に活 動内容とめあてを伝えておく。	
展 開	3 インタビューの仕方を知る。 4 (1)第1回選考委員会を開く。 発明者と選考委員に分かれて、準備する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">A: Hi. What do you want to be? B: I want to be a _____. A: Ok. Why? B: I like _____. A: Nice! A, B: Thank you.</div> (2)第2回選考委員会を開く。 発明者と選考委員を交代して、準備する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">A: Hi. What do you want to be? B: I want to be a _____. A: Ok. Why? B: I like _____. A: Nice! A, B: Thank you.</div> 5 選考委員は、「6-2ノーベル賞」にふさ わしいと思う発明を用紙に記入する。	○デモンストレーションを見て、イ ンタビューの仕方を知る。 ○映像を見て、感じのよい聞き方や 答え方を意識させる。 ・どんな基準でノーベル賞を選んだ らよいか分かりやすいように、 選考委員は選考基準表を持つ。 ●選考基準表 ●コミュニケーションポイントの絵 ●「6-2ノーベル賞」選考用紙 ●「6-2ノーベル賞」投票用紙 ・「6-2ノーベル賞」を決定するこ とが本時の目的ではないため、本 時では、投票だけさせて終了し、 結果は翌日に伝える。	☆積極的に活動に 取り組んでいる。 【ア①(観察)】 ☆相手を意識して 尋ねたり答えた りしている。 【ア②(観察)】
ま と め	6 本時の振り返りを、振り返りカードに書 き、発表する。 7 終わりの挨拶をする。	・めあての確認を再度行い、振り返 りのポイントをおさえる。	☆今日の活動につ いて気付きがある。 【ア①②(観察)(振 り返り)】

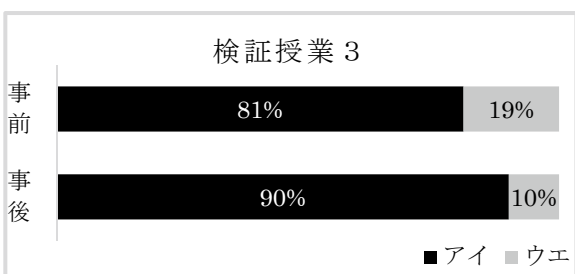
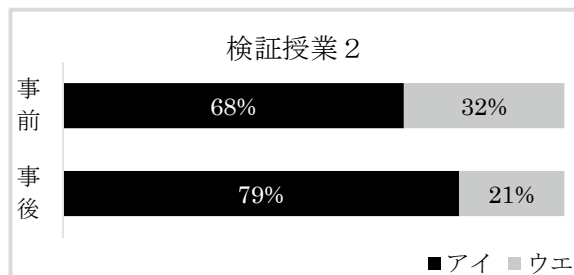
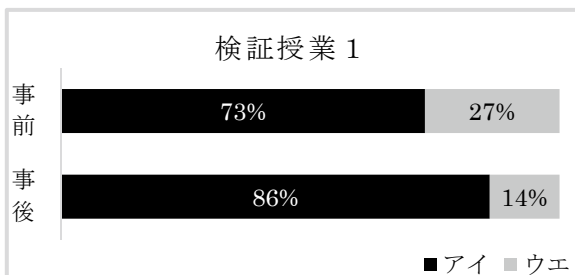
3 検証授業の結果と考察

三つの検証授業において、「積極性」を検証する事前・事後のアンケート及び振り返りカードを分析した。

(1) 事前・事後のアンケート

【質問】英語を使って自分からいろいろな友達と関わろうとしていますか。

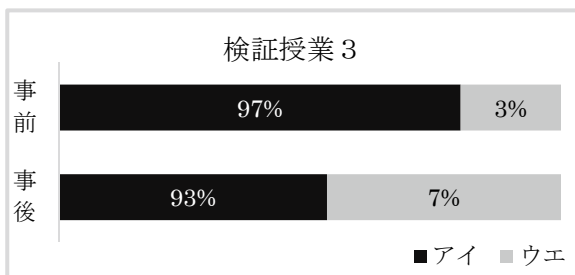
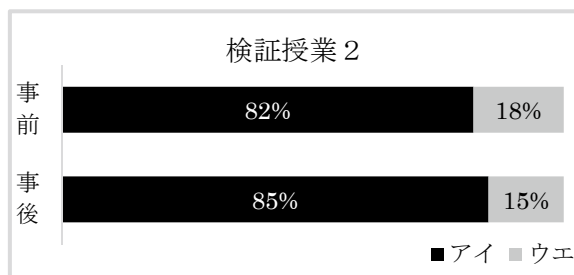
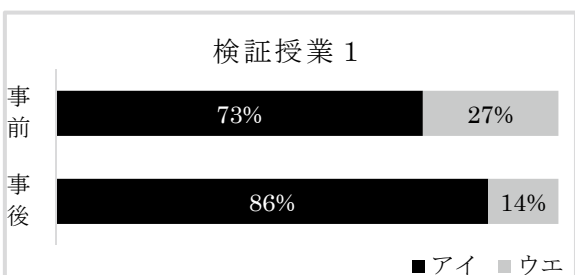
ア よくしている イ まあしている ウ あまりしていない エ していない



ウ・エの消極的な回答が減り、ア・イの積極的な回答が増えた。
→自分からいろいろな友達と関わり、コミュニケーションの楽しさを味わうことができたと考える。

【質問】英語やジェスチャーを使って、自分の思ったことや考えたことを伝えようとしていますか。

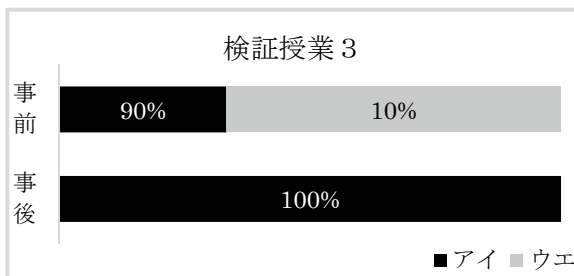
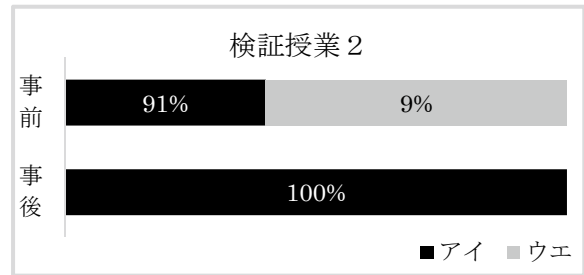
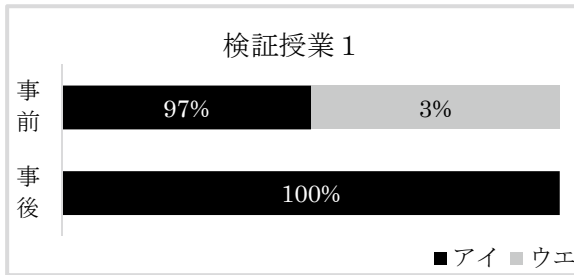
ア よくしている イ まあしている ウ あまりしていない エ していない



ウ・エの消極的な回答が減り、ア・イの積極的な回答が増えた。
→「英語で自分のことを伝えよう」という意欲が高まったと考える。
※検証授業3については、タブレットを活用し、ジェスチャーを使うことがなかったための結果であると考えられる。

【質問】相手の伝えたいことを理解しようとしていますか。

ア よくしている イ まあしている ウ あまりしていない エ していない



全ての検証授業において、ウ・エの消極的な回答が減り、ア・イの積極的な回答が事後 100%になった。
→「相手のことを知りたい」という意欲が高まったと考える。

(2) 振り返りカード (児童の感想)

検証授業 1	検証授業 2	検証授業 3
<p>【発】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が行きたい国とその理由が伝わって嬉しかった。 ジェスチャーを使ったり、指を指したりして何とか伝えようと努力した。 <p>【受】</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達と関わることが楽しかった。 聞き取れなかった英語を聞き返した。 「おすすめカード」があったので、分かりやすかった。 	<p>【発】</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手が分かるように伝えるのは難しかったけれど、答えを当ててもらえると嬉しかった。 ジェスチャーを使って教えたら分かってもらえた。 <p>【受】</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達のヒントは難しかったけれど、何度も言ってくれたので、よく考えたら分かった。 ゆっくり大きな声で説明してくれたので、よく分かった。 スペシャルヒントでジェスチャーを上手に使って伝えてくれたので、答えを当てられた。 	<p>【発】</p> <ul style="list-style-type: none"> たくさんの友達に自分のやりたいものを伝えられて良かった。 少し間違えてしまったけれど、最後まで伝えられて嬉しかった。 <p>【受】</p> <ul style="list-style-type: none"> いろいろな友達のやりたいものを楽しく聞くことができた。 みんな明るくて、目を見てくれたのでまねをした。 目を見てくれるかしてくれないかだけで聞く気持ちがすごく変わった。目を見ることはすごく大切だと気付いた。

※ 【発】 積極的に発信したと認められる感想 【受】 積極的に受信したと認められる感想

上記以外にもコミュニケーションに関する積極的な感想が多く見られた。
 →コミュニケーションの楽しさを味わい、「自分のことを伝えたい」「相手のことを知りたい」という思いをもって積極的にコミュニケーションを図ろうとしたと考える。

(3) 考察

下記の「コミュニケーションを図る必然性のある活動」を設定したことで、児童は積極的にコミュニケーションを図ることができたと考えられ、いずれも効果的であったと考える。

検証授業 1	検証授業 2	検証授業 3
<ul style="list-style-type: none"> ・ ツアープランを作成しよう ・ そうだ！世界旅行ツアーへ行こう！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ The Japan 検定！ ・ The プレゼンテーション of Japan 	<ul style="list-style-type: none"> ・ になりたい職業ランキング ・ ノーベル賞を決めよう！

「学びの段階」を工夫したことで、児童は積極的にコミュニケーションを図ることができたと考えられ、効果的であったと考える。

以上のことから、「コミュニケーションを図る必然性のある活動」を設定して「学びの段階」や「コミュニケーションの手だて」を工夫することで、児童は積極的にコミュニケーションを図ろうとするようになると結論付ける。

(4) 授業者の感想

	感想
検証授業 1	<p>【コミュニケーションを図る必然性のある活動（ツアープランを作成しよう）】</p> <p>○客（旅行者）として自分の思いを話し、更に新たな情報を得ることができる活動は、非常に児童の興味を高めた。旅行会社側も友達の行きたい理由を一生懸命聞こうとし、少し難しかったが、何とかして相手に伝えようとする姿勢が見られた。</p> <p>△「ツアープランを作成しよう」で「おすすめカード」を活用したことは、児童が積極的に活動する一助となった。しかし、発話量の確保も考えると、4～5時間の指導計画内で「おすすめカード」を作成する時間を確保するのは難しかった。</p> <p>【学びの段階】</p> <p>○「スリリングカードゲーム」の形態を全体からグループに変化させることで、同じゲームでインプットとアウトプットを行うことができた。</p> <p>○チャンツを活用して行きたい国とその理由の尋ね方と答え方・おすすめを伝える表現に慣れ親しませたことは、有効だった。また、児童にチャンツの歌詞を考えさせたことで、より関心をもって活動させることができた。</p> <p>△単語や英語表現が多かったため、慣れ親しみが足りず、友達に教えてもらったり、日本語に頼ってしまったりする場面が多かった。英語で伝えさせたい表現を決めておくなど、英語と日本語の線引きを明確にしておくことが必要であった。</p>

<p>検 証 授 業</p> <p>2</p>	<p>【コミュニケーションを図る必然性のある活動（The Japan 検定！）】</p> <p>○日本と外国の文化の違いに注目させ、紹介する物を自分で選んでヒントを考えたり、友達が紹介したい物をヒントを聞いて当てたりする活動は、積極的にコミュニケーションを図りたいという意欲につながった。</p> <p>○スタンプカードを作成し、その中に「名人」や「達人」を設定したことで、児童はより多くの友達と会話をしようという意欲を示した。</p> <p>△何も示さずに“What’s this?”と尋ねていたため、現実性のある会話場面にすることができなかった。「？」カードを指しながら質問するなどの工夫が必要であった。</p> <p>【学びの段階】</p> <p>○ALT に調べた物を紹介するという最終目標を提示することで、どうすれば分かってもらえるかという児童の主体的な思いを引き出すことができた。</p> <p>○「The Japan 検定！」では、出題者が何度も問題を出す機会があったため、“What’s this?”を含めた会話表現を何度も言うことができコミュニケーションへの自信につながった。</p> <p>△「The Japan 検定！」では、ヒントの単語が難しく、聞き取れずに答えをなかなか当てられない児童が多かった。インプットの場面で、児童が選んだヒントの単語を少しずつ扱っていったり、ジェスチャーだけでなく絵を描いて伝える方法を取り入れたりしても良かった。</p>
<p>検 証 授 業</p> <p>3</p>	<p>【コミュニケーションを図る必然性のある活動（6－2 ノーベル賞を決めよう！）】</p> <p>○「6－2 ノーベル賞を決める」という場を設定したことで、「賞に選ばれたい」「しっかり賞を選びたい」という気持ちが生まれて積極的にコミュニケーションを図る姿がたくさん見られた。</p> <p>○選考基準用紙には評価するポイントと自由記述欄を設けた。ポイントを意識して的確に評価しようとする児童、友達の良かったところをメモする児童が多く、評価する手だてとして有効だった。</p> <p>【学びの段階】</p> <p>○チャンツ、ゲーム、ランキングなどの活動でしっかり英語の表現に慣れ親しんだことで、「6－2 ノーベル賞を決めよう！」では、あまり無理なく“What do you want to be?” “I want to be a ○○.”を使ってコミュニケーションを図ることができた。</p> <p>○「6－2 ノーベル賞を決めよう！」では、伝えるための手段の一つとしてタブレットを活用した。英語だけでは伝わらないことを伝えることができ非常に有効だった。</p> <p>△「6－2 ノーベル賞を決めよう！」でタブレットを活用したのだが、プレゼンテーション資料を作成する時間を確保するのが難しかった。</p>

IV 研究の成果と課題

1 成果

(1) 必然性のある活動を設定すること

三つの授業とも、自分が行きたい旅行プランを立てる活動、自分が調べた物をクイズ形式で友達に紹介する活動、自分の発明を友達に説明するという活動という設定が、他者と意味内容を伝え合う必然性のある課題設定になっていた。自分が伝えたいことを考えて話す活動になっていたため、「自分の思いや考えを伝えたい、相手のことをもっと知りたい」という意欲につながり、目的意識をもって積極的に友達とコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。

検証授業2では、国語科の「和語・漢語・外来語」の学習で得た知識や体験を生かして活動を展開した。検証授業3では、日本人ノーベル賞受賞者が誕生したというニュースに着目してテーマを設定した。いずれも児童の知的好奇心を刺激する活動の設定であり、そのことがより積極的なコミュニケーション活動につながった。

(2) 学びの段階を工夫すること

自分の作った旅行プランで世界旅行に行く、ALT に日本の物を紹介する、学級のノーベル賞を決めるなど、単元のゴールを明確にすることで、児童はその前段階の活動でも友達とのやり取りを楽しむ姿が見られた。学習の到達目標を明確にすることが、児童の動機付けとなり、意欲を高め、積極的に活動に取り組むことにつながったと言える。

旅行者と旅行会社、クイズの出題者と解答者、菓の発明者とノーベル賞選考委員など、どの授業でも、相手を変えながら何度も同じやり取りをする活動を設定した。それにより、機械的な繰り返しではなく、意味のあるコミュニケーション活動の中で繰り返し発話することができ、児童がコミュニケーションに必要な表現を自然に習得していく姿が見られた。このように、児童が無理なく自信をもってコミュニケーション活動に取り組むようにするためには、インプットからアウトプットへの学びの段階を大切に単元構成が重要であると言える。

(3) コミュニケーションの手だてを工夫すること

英語でのコミュニケーション活動におけるやり取りを可視化することで、発話の順番や発話すべき言葉を視覚的に確認することができたため、児童がコミュニケーション活動を円滑に行う様子が見られた。検証授業1と3では、実際のコミュニケーション活動の場面を映像に撮り、活動前に児童に見せた。それにより、児童がどのようなやり取りをすればよいのかというイメージを明確にもって活動に臨むことができた。

また、自分が友達に薦めたい旅行プランを考えておすすめカードを作成したり、自分が考えたクイズの写真や実物を用意したり、自分が伝えたいことをより分かりやすくするためにタブレットに写真を取り込んだりする活動を入れた。コミュニケーションのために必要となる資料を児童自身が作成することで、難しい表現への不安を取り除き、より相手に理解してもらえるようにしようという思いを高め、コミュニケーション活動への自信や意欲につながった。

さらに、コミュニケーションのポイントを活動の前に提示し、児童に目指すべきコミュニケーションの姿を意識させた。児童が望ましい姿をイメージしたことで、互いに認め合う視点をもつことができた。また、教師が児童の姿を褒め、価値付けることにより、クラス全体でコミュニケーションにおける良さを共有することもできた。

このように、コミュニケーションの手だてを工夫することが、児童の積極的なコミュニケーション活動につながると言える。

2 課題

(1) 1 単位時間における児童の発話量を増やすこと

三つの検証授業から、コミュニケーション活動において、児童が自信をもって一人で発話できるようになるためには、相手を変えながら、同じ表現を 10 回前後使う経験が必要であることが分かった。チャンツやアクティビティで無理のない簡単な表現を楽しませながら繰り返し使わせ、コミュニケーション活動では、より多くの相手と会話できる設定を工夫することによって、自分で英語が使えたという自信や喜びを実感することができる。英語を使わなくてもできる活動をなるべく減らし、1 単位時間における児童の発話量を増やすことが必要である。

(2) 児童に使わせたい英語の表現を焦点化すること

児童の関心や意欲を高める課題を設定し、コミュニケーションを活発にしようとする、どうしても活動が複雑になって教師の説明が多く、時間のかかるアクティビティになってしまう。また、児童が伝えたい内容も難しくなってしまうため、自分の知っている英語の表現だけではうまく伝えられず、日本語に頼ってしまうことにもなる。ジェスチャーや絵を描くなど多様な表現方法があることを児童に示すとともに、児童に言わせたい英語の表現を焦点化することが必要である。

(3) 補助資料の活用方法

児童が自分の思いや考えを伝えたい、相手の思いや考えを聞きたいという願いをもち、自ら行動を起こすコミュニケーション活動を行わせるには、今回試みた補助資料は非常に有効であった。しかし、一方で、補助資料が充実し過ぎると、互いに会話を必要とせず、視覚情報のみで伝えたいことを理解させることができってしまうという状況が起こる。検証授業 3 では、補助資料がない授業の方が、児童は英語やジェスチャーを使って伝えようとしていたということを裏付ける結果となった。このことから、補助資料を作成するための時間確保といった課題も含め、児童の実態に合わせた活用の工夫・改善が必要である。

[引用文献及び参考文献]

○ 引用文献

英語教育の在り方に関する有識者会議(2014. 9)「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告」
JACET(2001)「教育問題研究会」
旺文社, 文部科学省監修(2009)「小学校外国語活動研修ガイドブック」

○ 参考文献

直山木綿子(2014)「小学校外国語活動のツボ」
アレン玉井光江(2010)「小学校英語の教育法 - 理論と実践」
文部科学省(2009)「小学校外国語活動 研修ガイドブック」
文部科学省(2008)「小学校学習指導要領」
文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」
東京都教育委員会(2015. 3)「平成 26 年度教育研究員研究報告書小学校・外国語活動」

平成27年度 教育研究員名簿

小 学 校 ・ 外 国 語 活 動

地 区	学 校 名	職 名	氏 名
墨田区	二 葉 小 学 校	主任教諭	真 田 洋 子
江東区	有 明 小 学 校	主任教諭	高 橋 陽 子
杉並区	桃 井 第 三 小 学 校	主任教諭	木 村 美 穂
練馬区	北 原 小 学 校	主任教諭	半 田 友 実
江戸川区	平 井 第 二 小 学 校	教諭	小 林 新 歌
立川市	第 三 小 学 校	主任教諭	大 森 則 子
三鷹市	第 五 小 学 校	主任教諭	○小 林 万 里 子
東大和市	第 八 小 学 校	主任教諭	◎永 野 愛 里 子
羽村市	栄 小 学 校	主任教諭	前 川 真 理 子

◎ 世話人 ○ 副世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部指導企画課
課長代理 田中 純子

平成27年度
教育研究員研究報告書

小学校・外国語活動

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成27年度第197号〕

平成28年3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 正和商事株式会社